京都●よさのうみ福祉会の実践

働く 生きる 私らしく from よさのうみ

最終回

働くことは自分らしく豊かに生きること

みやづ作業所　佐野恵理子

これまでの5回の連載では障害の重い仲間から一般就労を実現した仲間まで、障害の程度や種別、仕事も異なる仲間たちの働く姿をとりあげてきました。今回はまとめとして5回の連載を振り返り、障害のある人の働くことについて考えたいと思います。

工賃（給料）のこと

5回の連載すべてに工賃についての記述がありました。10月号の恵さんは障害が重く、働くことや工賃について認識できませんが、職員に支援されながら働き、工賃を得ることが家族の方のよろこびになっています。12月号の大島さんにとって工賃はUSJに行きたい、プラモデルなど好きな物を買いたいという望みを叶えるためにとても大切なものです。1月号の正人さんも工賃が増えたことでさらにやりがいを感じます。2月号の藤丸さんは自立できる給料を得るために一般就労をめざします。そして11月号の雅弘さんは工賃が倍近くアップしたことで食生活が変わり、好きなタバコも自分の思うように吸えるようになり、さらに趣味の読書のための英語の本も買えるようになりました。

工賃が生計の柱になっている仲間にとっては工賃のアップは生活の質を上げることにつながります。工賃は労働意欲を高め、生活を豊かにします。何にどう使うか、生活のなかでの位置づけはそれぞれにちがいますが、労働の対価として工賃を得ることは働くことの重要な意味だと思います。

作業所では仲間のために工賃を少しでも上げようと作業開拓や販路拡大など努力していますが、思うようにはいかないきびしい現実があります。障害のある人が生活の不安なく暮らしていくために障害基礎年金の引き上げや、日中事業所で働く障害のある人を福祉の対象でなく労働者と位置づけ、能力に応じて働いて最低賃金を支給する社会支援雇用制度の創設など、所得保障の充実が求められます。

障害者自立支援法、障害者総合支援法と法制度が変わっていくなかで就労継続支援B型事業では工賃向上計画に基づく工賃アップの追求、平均工賃による基本報酬のランク付けが行われ、働くことが目にみえる工賃だけでとらえられているように思います。生産性が低いといわれている障害の重い仲間たちが働くことから締め出されてしまうことにつながるのではないかと危惧します。

仲間と共に働く

12月号の大島さんは工程を分け、役割を分担して下請けの仕事をしています。担当している最初の工程のシール貼りは好きな仕事で、正確に早くできることを自分だけでなく、ほかの仲間からも認められ、仕事への自信を高めていきます。仲間と一緒に作業にとりくみ、自分一人では完成できないこと、みんなと協力しないとたくさんできないことを理解し、ほかの仲間を意識できるようになっていきます。集団で働くなかで自分が頼りにされ、仲間を頼りにすることで互いに認め合える関係をつくっています。

1月号の正人さんはほかの利用者と同じように仕事ができるようになりたいと失敗しても繰り返し、作業をがんばりました。そんな正人さんの姿を見ていた利用者たちが彼のがんばりを認め、受け入れるようになったことで仕事に対する自信を高めていきます。

刺激し合い、協力し合い、認め合える集団で働くことに意味があるのだと思います。

自分ひとりでは自分らしさに気づくことはできません。集団のなかでほかの仲間との関係を通して自分の存在や価値を認めることができるのです。

障害福祉制度が大きく変わり、個別支援計画の作成とそれに基づいた支援が求められ、個々に視点をあてることが重視される傾向があります。仲間一人ひとりの思いやねがいに基づいた個別の支援は大切ですが、それだけではなく、個々が所属している集団に視点をあてた支援が必要ではないかと考えます。

働くことによろこび、やりがいを

仲間たちは毎日どんな思いで仕事をしているのでしょうか。

11月号の雅弘さんは少しでも給料を増やしたいという思いから清掃作業をはじめましたが、掃除をしてきれいにすることのよろこびや自分の仕事が社会に役立っていることを実感するようになります。

2月号の藤丸さんは自立するという目標をもち、どうしたら早く仕事ができるか自分なりの工夫をして働いています。その仕事ぶりを認められ、働くことはいいことだと感じています。

このような彼らの姿を通して何のために働くのか、自分なりの目的があること、仕事のなかで自分の役割がわかり、主体的にとりくむこと、自分の仕事が役に立っていることを感じることが働くよろこびややりがいにつながっているのではないかと思います。

仕事ができるようになること、